

村の現状調査から 地域政策の将来を考える

「三浦家資料(第2次)」

三浦家は、生葉郡屋部村の阿南大膳正が筑後居住の初代と伝えられ、元和9年(1623)に竹野郡分地村に移り住んだと言われています。5代の時に三浦に改称し、6代以降、蔵八村の庄屋や下見役、川筋見廻り役などを務めました。

平成17年度には、幕末から昭和戦前期の田主丸町及び周辺の村の様子を窺い知ることのできる古文書や典籍類の寄贈を受けました。今回、第2次として寄贈された資料群は、田主丸地域の郡是や村是といった郡の行政に関するもの、福岡県の産業経済の統計に関するものなどです。



「郡町村是附録」(左)「福岡縣生葉竹野郡是」(中)
「福岡縣竹野郡船越村是」(右)

郡町村是は、明治20年代から大正時代にかけて、全国の郡町村で、現状と沿線を調査し、将来に向けた目標や指針をまとめたもので、当時の地方の地域施策の一旦を知ることができる貴重な資料です。

「福岡縣生葉竹野郡是」は、全国的に行われた町村是構想の最初の調査として、明治25年(1892)から同27年にかけて生葉郡1町9村、竹野郡1町6村の合計17町村を対象に、郡長である田中慶介統轄のもとで調査編纂されました。

両郡の良好な自然条件からもたらされる収益状況を分析し、提言として、殖産興業の策は、歳月をかけて実験や応用を繰り返すべきことなどが述べられています。



「福岡縣生葉竹野郡是」
殖産興業の策について書かれた箇所

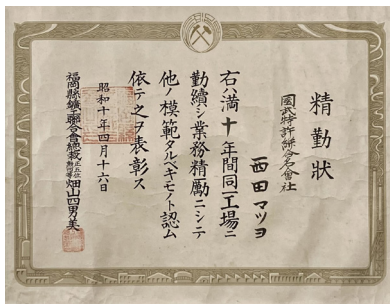
久留米 緋産業の発展を担う 近代の手織り職人

「西田家資料」

久留米緋製作を家業とした西田家に伝来した資料群で、内容は主に家業関係と家族の出征関係で構成されています。特に、機織りの名手として知られた西田マツヨ氏ゆかりの品々は、近代久留米緋産業の発展・最盛期の一端を伝えます。

マツヨ氏は、明治18年(1885)に御井町の織屋に生まれ、14〜15歳頃より緋を織り始めました。その腕を見込まれて西田家に嫁ぎ、40歳頃には、緋業界一の大手である國武特許緋合名会社に先生格として招かれるほどの腕前でした。

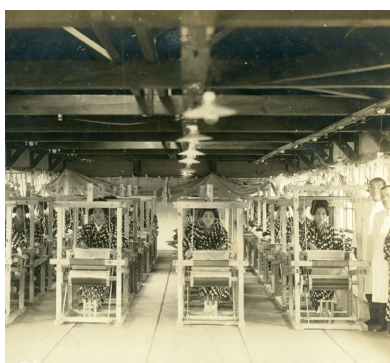
「精勤状」は、マツヨ氏の國武特



國武特許緋合名会社勤続10年の精勤状。上部中央には工具、周囲には煙突や立ち並ぶ工場がデザインされている

許緋合名会社での勤務が満10年を迎えた際に、福岡県鉦工聯合会総裁から贈られたもので、「模範タルベキモノト認ム」とあります。同聯合会は、大正15年(1926)に鉦業団体を中心に結成されました。労務者表彰、安全問題講演会、技術講習会などの事業を行っていました。

國武特許緋合名会社は、最盛期には約600名の工場従業員と2千人にのぼる自宅織工が在籍した、久留米緋の生産拠点です。工場内部の写真は、整然と並んだ織機と、同じ柄の制服に身を包んだ織子たちの姿を写しています。きりりとした表情から、機織りの仕事に誇りをもって真剣に取り組む織子たちの意気込みが伝わってきます。



部屋の奥まで織機が並ぶ國武緋工場内部